

○柏野 加賀國石川郡に屬す、北陸街道の一驛にして粟生驛を距ること一里十三町餘

よみかへりて、目出たしと云、此所に逗留すべき家にもあらざれば、とくと手足も動くやうに成りて、厚く謝禮をのべ、此次の町の柏野といふ驛に泊り、いろ／＼服薬せしに、身體常に復しかねて、二日餘逗留保養して、やう／＼に金澤に入れり。初て北地の雪吹に逢て命をうしなはんとし、其恐ろしき事を知れり。初程は養軒危きやうに見えしかとも、彼は無難にして余は既に死せんとせり。余は事に望んで氣は彌剛になれども、天稟虚弱の身、かゝる烈敷事に堪ることあたはず。養軒は其氣は少し怯なれども、身體充實して、丈夫なれば、二年の旅中全く恙無くして、あまたの危嶮を、凌げり。誠に北地は南方の人の信じがたき事のみ多かりき。

床下の聲

○新庄村 越前國今立郡に屬す、鯖江の東南にあり

越前國鯖江の近邊新庄村に、百姓の家の下にて何物か聲ありて、人のいふことの口まねす。家内の男女大に驚き、急に床板を引明て見るに、何事も見えす。又床をふさぎ、人々物いふ時は、何事にて床の下より口まねす。後には村中の沙汰となり、若き者共、毎夜大勢來り集り、色／＼の事をいふに、皆々床の下にて、口

まねす。上よりおのれは古狸なるべしといへば、狸にはあらずといふ。然らば狐

なるべしといふに、狐にもあらずといふ。猫かといふに、然らずといふ。鼯河太郎

獺殿鼠など、色々の名を出るに任せて問ふに、いづれにもあらずと答ふ。然ら

ばおのれはばた餅なるべしといひしに、なる程ばた餅なりといふ。それよりば

た餅化物と異名して、其近邊大評判に成れり。此事城下に聞えければ、奇怪の事

なりとて、吟味の役人大勢來り、一夜、此家に居て試るに、何の聲もせず。役人歸れ

ば、其翌夜は又聲ありて、いろ／＼の事をいふ。其後も毎度役人來りしかど、其來

れる夜は、一度も物を云はず。故にせんかたなくて、其まゝに打捨置しが、一月ば

かりして、其後は何の聲もなく、怪事は止にけり。何の所爲といふことも知れず、

いかにしてやみたりといふことも無くて、おのづから治りぬ。

飛根の城跡

○鶴形、飛根 後國山本郡に屬する村なり

出羽國秋田城の東邊、既に津輕地に近き所に、鶴形、飛根などいふ所あり。此邊津輕地を界たる所にて、山の姿川の流れ頗る要害の地形なり。然るに此邊山甚高からずして、或は川を前に受、或は兩山相對し、或は數里一望に見はらし、すべて

皆山の上甚平にして、古城の跡、嚴然と備れり。然れども、他所の城跡に異りて、地面甚廣大にして、十町、二十町に連れり。或は中に一山高く、四面は山の委堤のごとくめぐれる有り。或は山連り屈曲して、所々に通路の道を開けるも、有り。山は何れも皆上平にして、人作にて山を引ならしたるものなり。天然の山の姿にはあらず。此あたりにて何人の城跡にやと尋るに、知ものなし。又古書傳記にも、此あたりにかく、廣大の城郭を構へ住たる人を聞かず。日本紀などに、上古蝦夷を征して鎮府を置しやうにも見えず。何にもせよ、人力を費したる事、豊臣太閤なぞの十倍にも至るべし。日本古今いまたさる人を聞かず。案ずるに、上古の世、蠻夷の住たる時、彼人に格別の豪傑ありて、かくのごとき事をなせしや、いふかじき事の限りなり。博物の人に見せば、考ふる所もあらんや。是れ人の沙汰せざる所なれば、書しるせり。又津輕地に入りて、碓が關の山の氷口に城跡あり。是も飛根なぞのごとく、山を引ならし。前は大河を受たり。矢倉の跡、或は城門の跡など、嚴然と残りて見ゆ。此城跡も他國の名高き古城の跡、杯よりは、格別に大なれども、飛根のごとく、數里に連り、四方にはびこれるにはあらず。飛根にくらぶれば、十分か一にも足らず。此碓が關は何人の城跡にやと、所の者に尋るに、是も何人

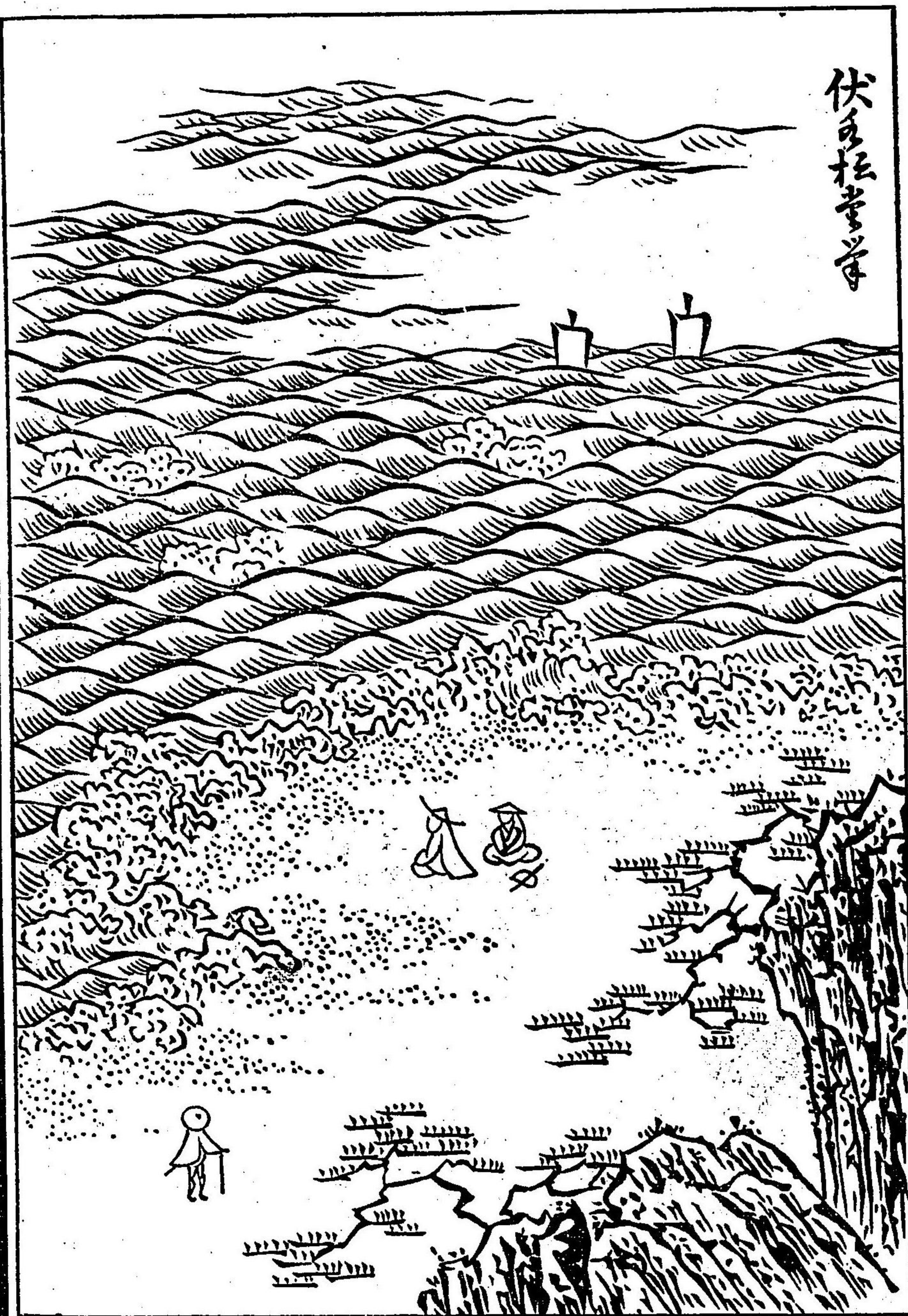
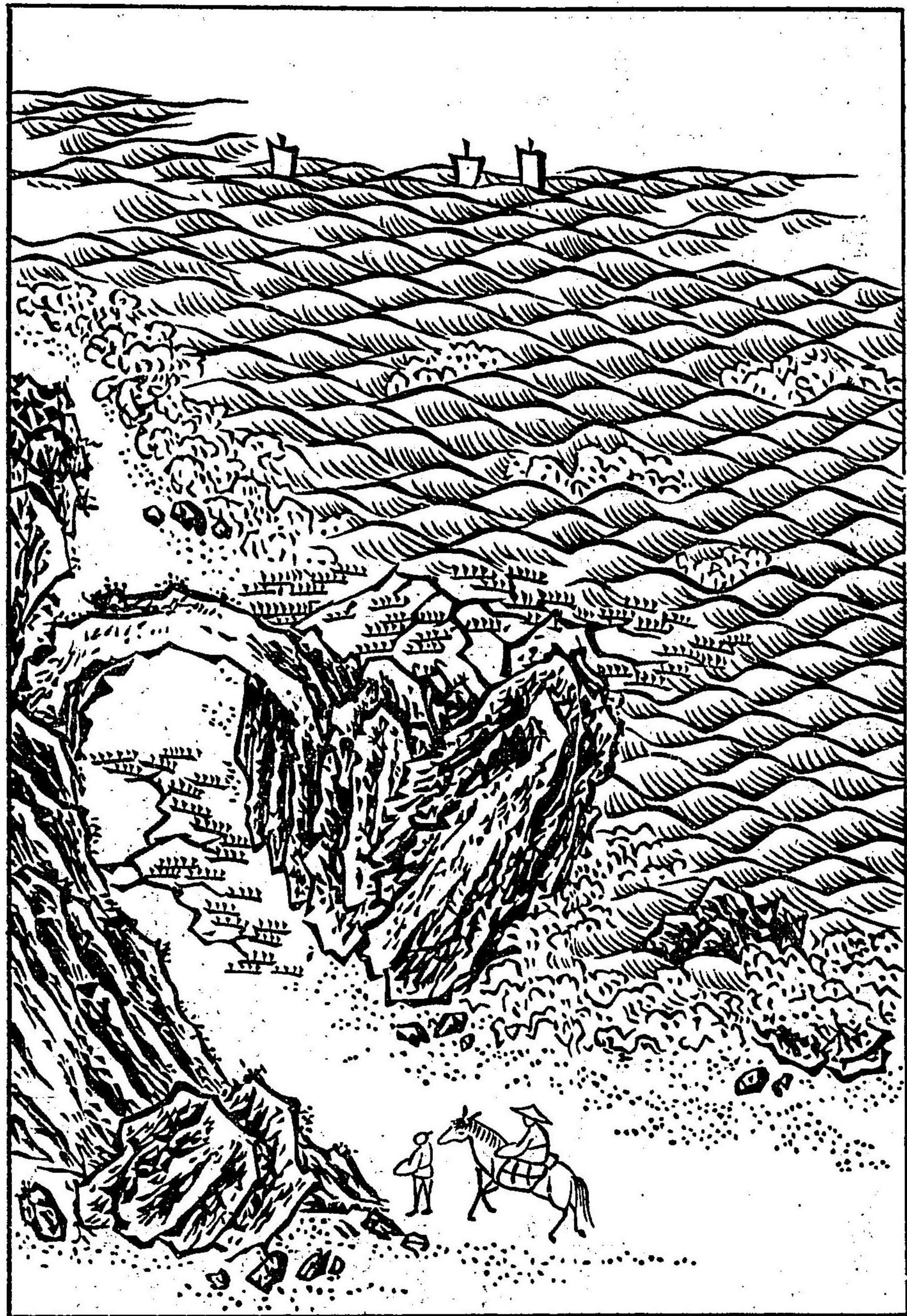
○碓が關の南奥國にあり、飛根の東南にあり。

といふことを知る者なし、所の人も只城跡と計覺えたり。今に土中より木刀、各種々の兵器を掘出す事多しとなり。されば、纔に三四百年か五六百年には過ざらん事を、文華無き國なれば、書傳ふる人も無くなれりける事にこそ。

舍利濱

奥州外、か濱にホロツキといふ所有り。此海邊に舍利濱あり。小石濱なるが、其中に舍利石まじれり。白きあり、色なるあり。大豆のごとく、米粒のごとく、明徹滑澤甚愛すべし。此所を通りし日は、天氣殊に朗なりしかば、濱邊に座し、舍利石をひろひ、甚樂り。回國修行の者、杯は、此舍利石をひろひ、大に尊信する事なり。殊に奇なる事は、此濱の磯近く、海中に廣さ五十間程の舍利母石あり。此舍利母石より常く、舍利を産し、其舍利をちて、此濱に打わけ、古今絶せず。此故に舍利多しとなり。其舍利母石、水面より余程深く沈み居て、濱邊よりは見えかたし。此邊の漁父に頼めば、海底に没入して、玄翁にて打破り取わがる事なり。此故に此舍利母石を得る事は、頗る難し。されど珍敷物なれば、余も指の頭程の舍利母二ツ三ツを得て歸れり。其全體の色は薄黒く、土の化したる石のごとくにして、其中

○外に注せり、四十四、母衣、國、陸、奥、國、東、津、輕、郡、に、あり、飛、根、の、南、奥、國、に、あり、碓、が、關、の、東、南、に、あり、



伏見松堂

物語也

○今別本百十二頁を見よ

に米粒のごとき小舍利夥敷孕め、誠に奇なる石なり、又此舍利濱の先きに今別といふ所あり、貳三里も隔れり。此所の濱を瑪瑙濱といふ、此濱に入る前後に自然の石門あり、甚奇境なり。夫より内、凡半道餘、瑪瑙石の濱なり。尤常体の石も半まじれり、凡石も瑪瑙も、大さ大抵拳の程より鶏卵或は小きは蠶豆のごとし。皆々甚明徹にして、京都にて緒々にするものなり、世に津輕玉といひ、又は寶石ともいふ。人馬往來する濱なれば、足元に玉石みち、殊に日光にきらめきて、目眩する計なり、其うるはしさに心留りて、過行へくも覺えず、程よきはひろひ取りて、袖に入る程に、雨の袂やぶる、計なり、されど長き旅路携へ歸りがたく、毎夜三つ四つづ、人に與へ、京まで携歸れるは纒ばかりなり。かくのごとき濱、京近くにあらましかば、守る人も嚴敷、門戸杯もありて、みだりに見る事たにも許さましきを、かゝる人無き邊地なれば、道行人の取に任せ、誰一人禁する者なし、めつらしき地なり。

銅山

山

○阿仁 羽後國北秋田郡に屬す

出羽國秋田領城下より東南の方近道を行て十八里の所に阿仁といふ所あり。

此阿仁に銅山あり。當時此山より夥敷銅を掘出す事なり。掘入穴の中をシキナイといふ、甚奥深く掘入ることなり。入る者皆サ、イ殻に燈をともし持入るなり。扱數十町奥深く掘入り、世界の風氣通はざる所に至りぬれば、其燈火たちまちにさゆるなり。燈火さゆれば、人も亦呼吸の氣息たちまちに絶て死するなり。此ゆゑに燈火さゆる所に至れば、急に逃歸る事とす。此事我醫事に大に考に成る事にして、人の死生物の生滅の妙を知へし。余も此穴の中に入り、試んと欲せしかども、甚嶮難の山路、十八里、其上往來の人宿といふも無く、殊更穴の中は金石の毒氣ありて、他邦の人常に其氣に馴る者は、毒氣にあたり死する者多しといひ、又其國の禁制にて、旅人などは、みたりに銅山のあたり徘徊する事を許さざれば、無據もだしぬ。右のごとき奥深く入れは、死すれども、又奥深く銅多くして、入らて叶さる時は、穴の小口より下に樋を伏せ、風氣廻るやうにして、幾十丁にても入るなり、是を風廻しと云。かくのごときして入れは、何程入りても燈火さゆる事なく、人も死する事なしとなり、是亦其妙用を知るへし。其外此阿仁の山は上品の岩、綠青孔雀石等を産す、猶石藥の類は種々の珍氣多し。イケマ杯も甚肥大なるもの多しとなり。

○イケマ 藥料植物にして、漢名を牛皮消といふ、藥草なり

尺切れといふてけり、壹尺五寸切らすべかりしを、今五寸切べし、高く見ゆると仰有ければ、大工等大に恐怖して申やう、此門は本の門のやうに建合せ候を、壹尺切れとの勅定なから、仰のまゝに切候ひては、無下に低く成り、遠く見上るに高やかなるこそさらしく候へ、かゝる離れ家の平かに見えたらんは、見苦しと思ひて、五寸を切りて候を、今五寸と仰けるは、初に御覽したまへるにあらす、五寸隠して切り候はぬを、御目の程恐れ感し奉りぬと申上ぬ、帝今切らは遷都の間にもあはじ、さらば其通にて有べし、但し風にて荒ければ、吹倒さるゝ事も有ものぞ、と勅定なりぬ、大工等いみしく強く造り候上に、猶又五寸切て候得は、さらに危き事候はしと申けり、扱都うつりの後、末の世に至り、三度ばかり吹倒されたとこそ、されは門閣の高低尺寸を争ふ事かくのことし、今東都は南に海を受、北に山嶽遠く、東西も猶平原の國にして、風行高からざるの地なり、是亦年々まざる繁榮、壹寸の空地も無く、莖を連ね、釜をならふれば、たましく失火有る時に救ひがたくして、大火に及ぶもむべなり、然るに彼寺門高さ壹尺を減して、建たる事風の患を避け、火の災を逃るゝこと、土地に應じて大幸の差圖と覺へつるまゝ、いかなる宏智の者の好みなりけると思ひしに、反て彼大工是を

憂て死せる事、只眼前の好否に泥て、大利の得失をしらさりしなり、恨らくは我來る事おそく、渠か去ること早くして、其愁死を救はさりし事をこそと、仰有りしか、果して此寺門今に至りて、風火の災を逃れ來れるこそ不思議なれ。

氣 候

凡國々東西は幾千里隔れりといへども、日の行道同じければ、氣候大抵ひとし、南北を違へは、纒にても寒暖大に變ず、大概は極星の高低にて居なから、其國々の氣候は知るべし、其内山の向背にて少しつゝの寒暖も有り、先日本にて論すれば、日本は一つの嶋山にして、其嶋山の絶頂といふは信濃國なり、それより四方へなたれ下り、東西の國あり、南北の國あり、南面北面それゝの向きゝ、あり、薩摩、大隅、日向の地は、其南にありて、最暖氣の國なり、雪霜氷の類は、其方角によりて全く無き所あり、それゆゑ彼地いかなる高山深谷といへども、三冬にわたりて雪有る事無し、又人家に火燧といふものなく、足袋、頭巾の類用るに不及、尤冬は天氣常に晴朗にして、風亦強からず、此ゆゑに冬も虫蟄せず、蜘蛛、蚊、蛇、虻の類四時有り、亦草木も是に應じ、蘇鐵蘭の類も自然生の山有り、人家の庭に

記せんものなをさ、近き頃見たりたる、
ふに聞け又人の集め
有非平左衛門此武
集るに集めたり
り其主年其遊た
て死華に來り病に
名山記は如何なり

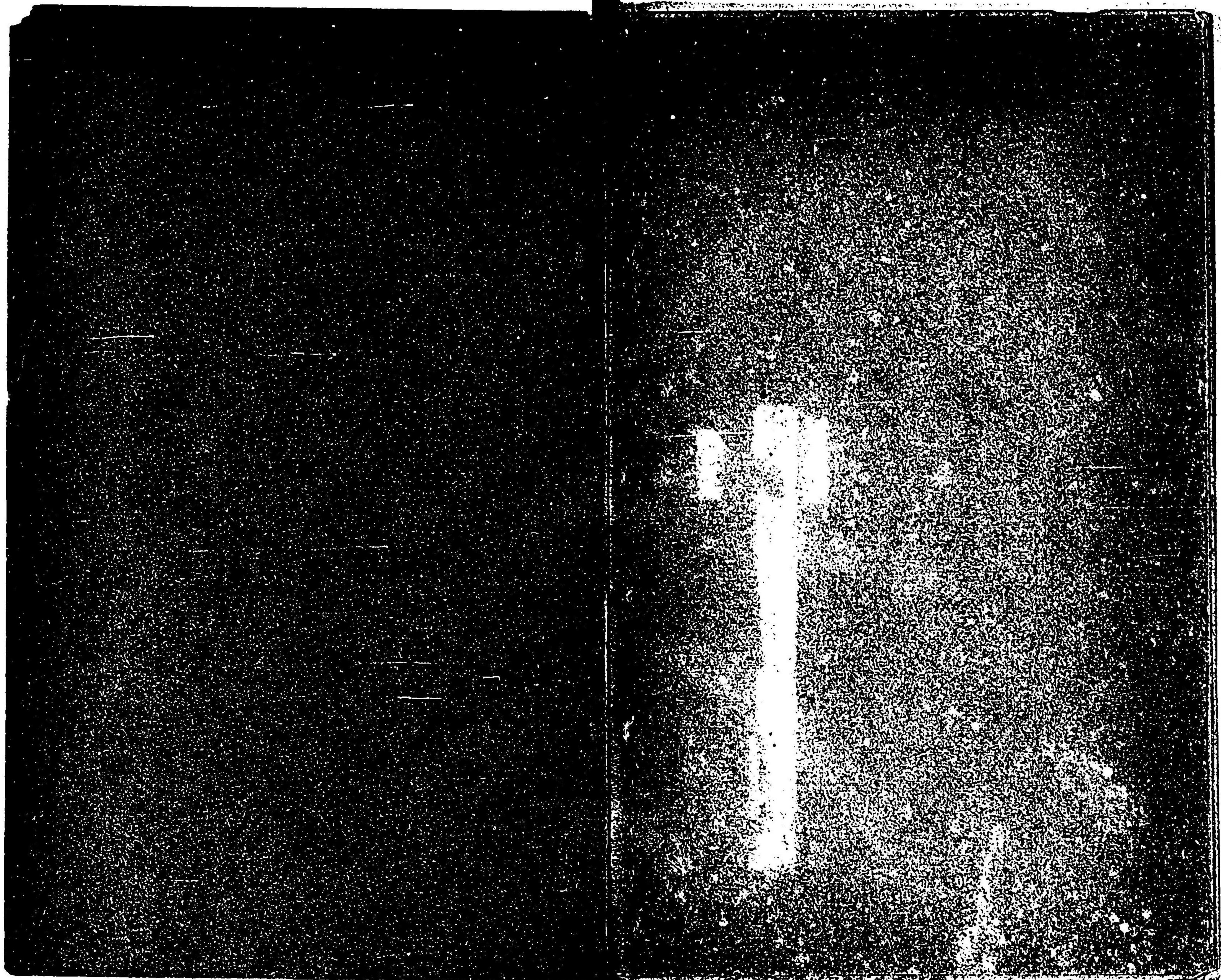
吹山、越後の妙高山、信濃の戸隠山、甲斐の地藏嶽、常陸の筑波山、奥州の幸田山、御
駒か嶽等なり、其餘は碌々論するに不足、伯耆の大山、上野の妙義山は余いまだ
是をみず、其高低を知らず、出羽の羽黒山のことき、其名高けれども、其山は甚低
し、都の鞍馬山程にも及びがたし、湯殿山も叡山よりは低かるべくみゆ、是は佛
神垂跡の地ゆゑに、參詣の者多きによりて、其名高きなり、山の姿峨々として峻
岨、畫のごとくなるは、越中立山の劔峯に勝れるものなし、立山は登る事十八里、
彼國の人は富士よりも高しと云、然れども越中に入りて、初て立山を望むに、甚
高きを覺ゆず、數月見て漸くに高きを知る、是れは連峯參差たるゆゑなり、最高
く登え、たがいに相争ふ程なる峯五つあり、劔峯も其一なり、其外にも峯々、甚
多く連り、波濤のごとく連り、皆立山なり、此ゆゑにたとへば都の北山を望むが
ごとし、遠くより見るに何れを鞍馬山とも稱しがたきかごとし、是をみても人
多能なる者は、反て其名を失ふを慎むべし、白山は只一峯にて根張も大に誠に
雪四時ありて白玉を削れるがごとく見るより、目覺る心地す、又山の姿のよき
は鳥海山、月山、岩城山、岩鷲山、彦山、海門嶽なり、皆甚富士に似て、一峯秀出、畫かけ
るごとし、又景色無双なると薩摩の櫻島山なり、蒼海の真中に只一つ離れて獨

立し、最峻峻なるに、日光映すれば山の色紫に見え、絶頂より白雲を蒸かごとく、
煙り常に立登る。たとへは青疊の上に香爐を置たるがごとし、大抵海内の名山
是等に留るべし、其山内の奇絶は又別に書あり、今此所には仰望む所を論する
のみ。

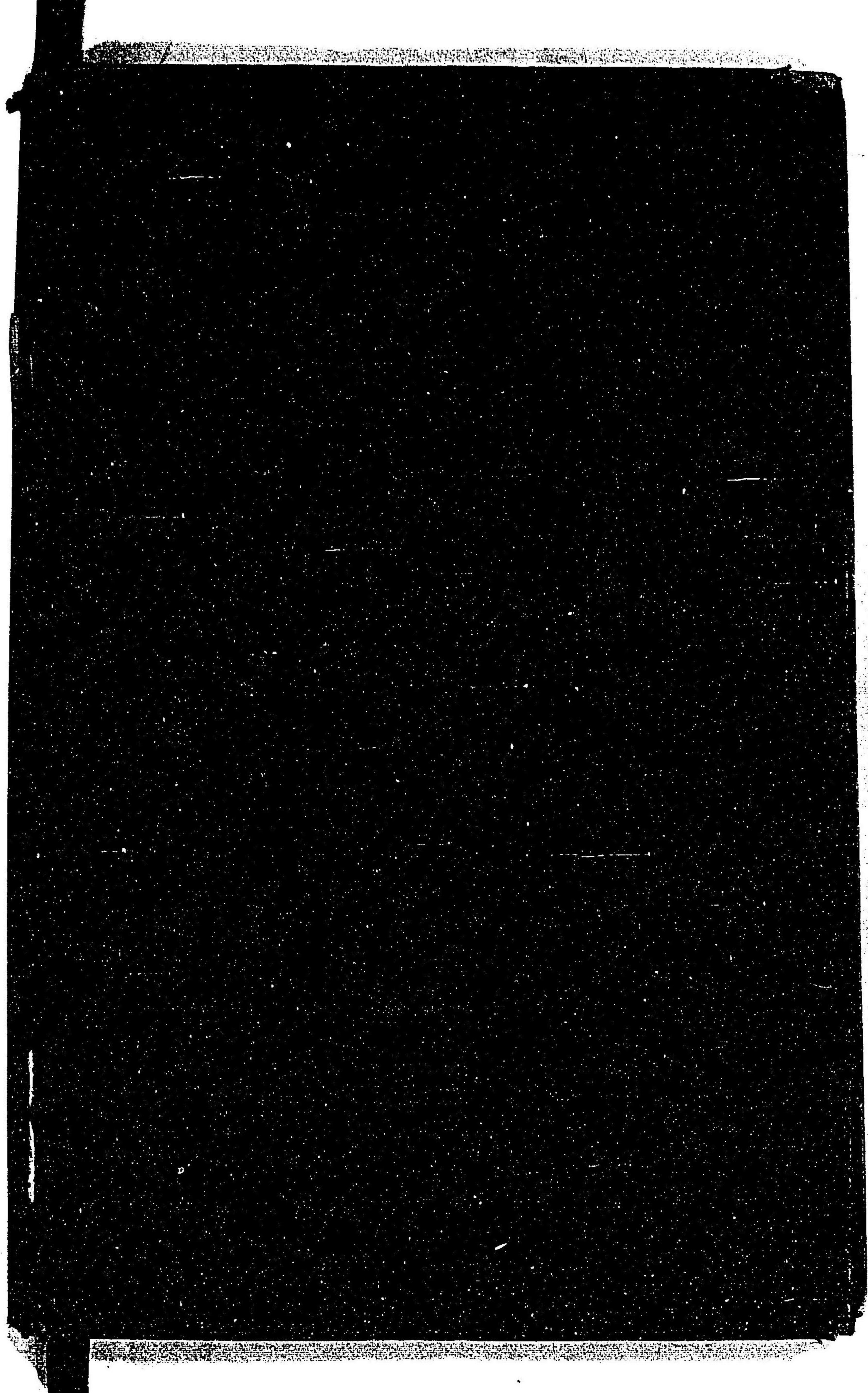
鉄先

蝦夷島は文物いまだひらけず、物事實朴のみにして、唐日本の大昔のことし、金
銀米錢といふものもなく、綾羅錦繡といふ者もなし、唯ひかしより持傳へたる
寶物あり、鉄先といふ、金鐵にて作りたる兜の鉄形のやうなるものなり、蝦夷地
周廻八百里といふ島中に、纔に此鉄先を持傳へたる者、三五家に不過といふ。此
鉄先に甚神靈ありて、病氣或は災難などある時に、是に祈請すれば、甚奇特あり
て、しるしを得る事なり、故に此鉄先を持傳へたる者は、島中の者より尊信して、
自然に其所の頭のやうに成り居る事とぞ、此鉄先甚古き物にて、幾千百年のも
のともしれず、書物なき國にて古き傳來しれざれば、何れの時のものにて、何の
用になす物ともしれず、一説には源義經蝦夷地に渡り、威を振ひ、夷人甚尊敬し

○鐵先、蝦夷風俗、
雲、巖、嶽、日、其、
實、の、中、に、最、重、
す、る、物、は、狀、態、
に、似、て、一、口、に、
掛、く、各、一、口、に、
地、室、に、祭、る、是、
を、時、に、祭、る、是、
を、此、教、に、祭、る、
此、教、に、祭、る、
日本、の、武、器、に、
重、し、い、神、器、に、
サ、キ、を、見、る、に、
不、同、な、見、る、に、
商、人、の、頭、に、
土、の、頭、に、
り、取、り、
の、云、ひ、
の、云、ひ、
の、云、ひ、



46
93



45

93

